

第13回 ジャーナリストとしてのワイルド

ワイルドの経歴を見ると、ジャーナリズムとの関わりを無視することはできないだろう。ジャーナリストとしてのワイルドの活動や雑誌編集長としての経歴を持っている。

(1) ワイルドとジャーナリスト

日本のワイルド研究の中でも「ジャーナリストとしてのワイルド」はこれまであまりに大きく取り上げられていない。しかし、ワイルドの生涯を振り返って見れば、ジャーナリズムとの関係は決して薄いわけではない。

Oscar Wilde is well known as a wit and as the author of dazzling society comedies and the controversial novel *The Picture of Dorian Gray* (1891). However, what is less well known is that Wilde spent much of his life working as a journalist. His work began appearing in the periodical press as early as 1876 with the publication of some of his poems in the *Irish Monthly* and *The Month and Catholic Review*. He worked full-time as a journalist between 1885 and 1890. During these years, Wilde produced more than seventy reviews for the *Pall Mall Gazette* alone. ⁽¹⁾

アメリカ講演といった活動もあったが、彼のジャーナリストとしての活躍はおもに『ペル・メル・ギャゼット』(*Pall Mall Gazette*)、『ドラマティック・レビュー』(*The Dramatic Review*)、『コート・アンド・ソサエティ・レビュー』(*The Court and Society Review*)、『ウーマンズ・ワールド』(*The Woman's World*)で批評や劇評等の発表、あるいは編集長としてその手腕を奮っていたのである。しかし、全体としては、

Wilde's career in journalism came about as the result of a series of failures and fortuitous coincidences. ⁽²⁾

ということになるうか。

ワイルドがジャーナリズムとのかかわりを持つのは、『ダブリン・ユニヴァーシティ・マガジン』にアリストファネスの『雲』(*The Clouds*)からの詩を“Chorus of Cloud-Maidens”と訳し、掲載したのが明治8年(1875)11月のことであった。⁽³⁾この年6月にワイルドはマハフィー教授等と北部イタリアへ旅行している。同雑誌上には明治10年(1877)には「グロヴナー・ギャラリー」(“The Grosvenor Gallery”)の評論を発表した。また、『ペル・メルギヤゼット』には明治18年(1885)から明治23年(1890)にかけて80編以上の評論等を寄稿した。

ワイルドは評論等の発表で、ジャーナリズムに加わっていただけでなく、アメリカ講演などは、まさにジャーナリズムを利用していった。ワイルドにとって雑誌への投稿、講演は最も手のつけやすかったところかもしれない。

(2) 『ウーマンズ・ワールド』

明治20年(1887)5月18日に『レディース・ワールド』誌と契約を結び、11月には編集長として『レディース・ワールド』改め、*The Woman's World* (『ウーマンズ・ワールド』)の第1号を発行するなど、雑誌等への投稿だけではなく、実際に編集長として手腕を奮ったのである。在職期間は明治22年(1889)10月号まで約2年間であった。『ウーマンズ・ワールド』はワイルドが編集長をやめたあと、ファッション中心の編集方針に戻って立て直しを図ったが、明治23年(1890)の秋に廃刊となった。大正2年(1913)の『六合雑誌』(第391号)のうちがさき「大思想家の婦人観」の中でワイルドが言及されているが、この第391号が婦人問題特集号で、ワイルドが『ウーマンズ・ワールド』の編集長を務めていたことが、この特集で取り上げられた理由かもしれない。うちがさきとは内ヶ崎作三郎(1877-1947)のことである。

ワイルドとの関連性については確証はないが、日本でも女性向けの雑誌が明治以降次々と出版されている。これには明治時代における教育制度や「新しい女」の影響が考えられる。おもな女性雑誌（家庭雑誌を含む）を参考までにその創刊年を紹介しておきたい。

明治 18 年(1885)	7 月	『女学雑誌』
明治 20 年(1887)	7 月	『以良都女』
明治 24 年(1891)	2 月	『花乃園生』
明治 24 年(1891)	8 月	『女鑑』
明治 25 年(1892)	9 月	『家庭雑誌』
明治 29 年(1896)	9 月	『大倭心』
明治 34 年(1901)	1 月	『女学世界』
明治 34 年(1901)	1 月	『をんな』
明治 35 年(1902)	4 月	『少女界』
明治 35 年(1902)	7 月	『婦人界』
明治 36 年(1903)	4 月	『家庭の友』
明治 38 年(1905)	1 月	『女子文壇』
明治 38 年(1905)	7 月	『婦人画報』
明治 39 年(1906)	1 月	『婦人世界』
明治 43 年(1910)	3 月	『婦女界』
明治 44 年(1911)	9 月	『青鞥』
明治 44 年(1911)	12 月	『淑女かゝみ』
大正 1 年(1912)	9 月	『婦人評論』
大正 2 年(1913)	1 月	『大正婦女社会』
大正 2 年(1913)	6 月	『家庭之園芸』
大正 4 年(1915)	5 月	『女の世界』
大正 4 年(1915)	5 月	『婦人週報』
大正 5 年(1916)	1 月	『婦人公論』

大正 6 年(1917) 3月 『主婦之友』
大正 6 年(1917) 4月 『才媛文壇』
大正 6 年(1917) 5月 『千葉県婦人脩養と文藝』
大正 7 年(1918) 3月 『女子文藝』
大正 9 年(1920) 9月 『女性日本人』
大正 9 年(1920) 10月 『婦人くらぶ』

大正 4 年(1915)5 月に創刊された『女の世界』は、英語表記にするとすれば *The Woman's World* ということになるろう。洋の東西を問わず、「新しい女」(the new woman)が大きく脚光を浴びた時代があったということであろうか。

(3) 千葉亀雄「ワイルドの新聞観」

大正 15 年(1926)6 月の『新聞紙学講座』(文藝春秋社)には以下の内容が収載されている。

ロオランの新聞観
ジャアナリズムの定義
ワイルドの新聞観 (一)
ワイルドの新聞観 (二)
世界新聞発達史
イギリスの新聞史

ここではまずジャアナリズムの定義を見ておきたい。

ジャアナリズムとは、その時々起きた事件を告げ知らせ、現はし、また研究することに関係した文書の一部門である。⁽⁴⁾

現在では一般的には次のように定義されている。

ジャーナリスト[journalist] 新聞・雑誌などの編集者・記者などの総称。
ジャーナリズム[journalism] 新聞・雑誌・テレビ・ラジオなど時事的な
問題の報道・解説を行う組織や人の総体。また、それを通じて行われる
活動。⁽⁵⁾

この時代にはジャーナリズムの中心は新聞であったということになるだろうか。ジャーナリズムは「清新」「珍奇」を求め、文学については「いくら繰返して読んでも、また後世に読んでも、人類に訴へる力はいつも變らない」⁽⁶⁾と、ジャーナリズムと文学の違いについて触れている。「ワイルドの新聞観(一)」ではアメリカのジャーナリズム、「ワイルドの新聞観(二)」ではイギリスのジャーナリズムについて触れている。

文学者がジャーナリストであった事例はいくらでもある。ワイルドに多大な影響を受けた三島由紀夫もまたそのひとりであり、アーネスト・ヘミングウェイもそうである。

「ジャーナリストとしてのワイルド」はこれまであまり取り上げられていなかった。しかし、最近では平成9年(1997)には Peter Raby 編集の *The Cambridge Companion to Oscar Wilde* (Cambridge: Cambridge University Press)には John Stokes“Wilde the journalist”、平成12年(2000)の Josephine M. Guy と Ian Small 編集の *Oscar Wilde's Profession* (Oxford University Press, 2000)には“The Journalist”や“Appendix B: Wilde's Journalism”などが取り上げられ、また、*Oscar Wilde: Selected Journalist* (Oxford University Press, 2004)なども出版されるなど、新しい動きもある。日本でも、平成16年(2004)2月の角田信恵『『女の世界』におけるオスカー・ワイルドの性の政治学——ワイルドが予定した寄稿者たち』(『岐阜聖徳学園大学紀要 外国語部編』第43号、岐阜聖徳学園大学)、同年3月の鈴木ふさ子「オスカー・ワイルドと三島由紀夫にとってのジャーナリズム」(『Ferris

Wheel』第7号、フェリス女学院大学大学院人文科学研究科英米文学英語学研究会)などが発表されており、多様化するワイルド研究の一端が伺える。

参考資料

佐々木隆「大正時代のワイルド受容」(『武蔵野短期大学研究紀要』武蔵野短期大学、2001年6月)

注

- (1) Clayworth, Anya, editor. *Oscar Wilde: Selected Journalism*. (Oxford: Oxford University Press, 2004), p.ix.
- (2) Ibid., p.x.
- (3) Beckson, Karl. *The Oscar Wilde Encyclopedia* (New York: AMS Press, 1998), p.49.
- (4) 『新聞紙学講座』(文藝春秋社、1926年6月)、p.1
- (5) 『広辞林』(平凡社、1990年4月)、p.1106.
- (6) 『新聞紙学講座』、p.3